

石材と人間の民俗的・歴史的関わり

神 谷 厚 昭

(沖縄県立博物館)

Folkloric and Historical Relations between
the Stone Materials and the Human Life

Koshio KAMIYA

(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

沖縄県内の石造物に目を向けてみると、琉球石灰岩の利用頻度が極端に高いのに気づく。また、沖縄県立博物館の展示品や、博物館周辺に目を向けると、琉球王国の首都であった首里の町には、歴史的な文化財がいたるところにあって、やはり石製の文化財が多い。それは、身近に接する機会の多い石敢當からはじまって、遠く中国から輸入された岩石を利用した石製文化財であったりする。今回、琉球石灰岩を含めた石造物・石製文化財の材質について、博物館ボランティア講座や文化講座等の資料を得るために調べた。その結果を報告し、あわせて岩石から見た博物館収蔵品および文化財についていかか考察を試みてみたい。

I. 琉球石灰岩と人間との関わり

琉球石灰岩は、沖縄県の島じまに広く分布し、全陸地面積の約3分の1を占めている。地質時代でいえば新生代第四紀更新世に形成された新しい石灰岩で、沖縄県の代表的な岩石である。この琉球石灰岩と私たち沖縄の人々とはいろいろな面で関わり合いが深い。それは遠く旧石器時代に遡ることができる。ここでは、琉球石灰岩と沖縄の人々との関わりを幾つかの特徴から見てみたい。

1. 琉球石灰岩と遺跡の分布

図1は沖縄島の琉球石灰岩の分布と、旧石器時代～縄文時代の遺跡との関係を図示したものである。これから明らかのように、琉球石灰岩の分布する地域と遺跡の分布地域はかなりの割合で重なることを示している。これは、琉球石灰岩地域が貝塚人たちの住む地域であったか、または、遺跡の状態が琉球石灰岩地域において保存されやすかったかのいずれかであることを示している。前者は仲泊貝塚の住居跡遺跡や住居跡と考えられる山下洞

穴などが琉球石灰岩に形成された岩陰や鍾乳洞であることから確認できるし、後者は港川フィッシャー遺跡の例のように、人骨をはじめ多くの動物遺骸が良好な状態で保存されて産出することから推定できる。人骨や動物遺骸の保存されやすい理由は、石灰岩風化土壌が中性～弱アルカリ性であることと、遺物が石灰化をしばしば受けていることによる。

このように、昔から、人間と琉球石灰岩は切り離せない関係にあったわけである。

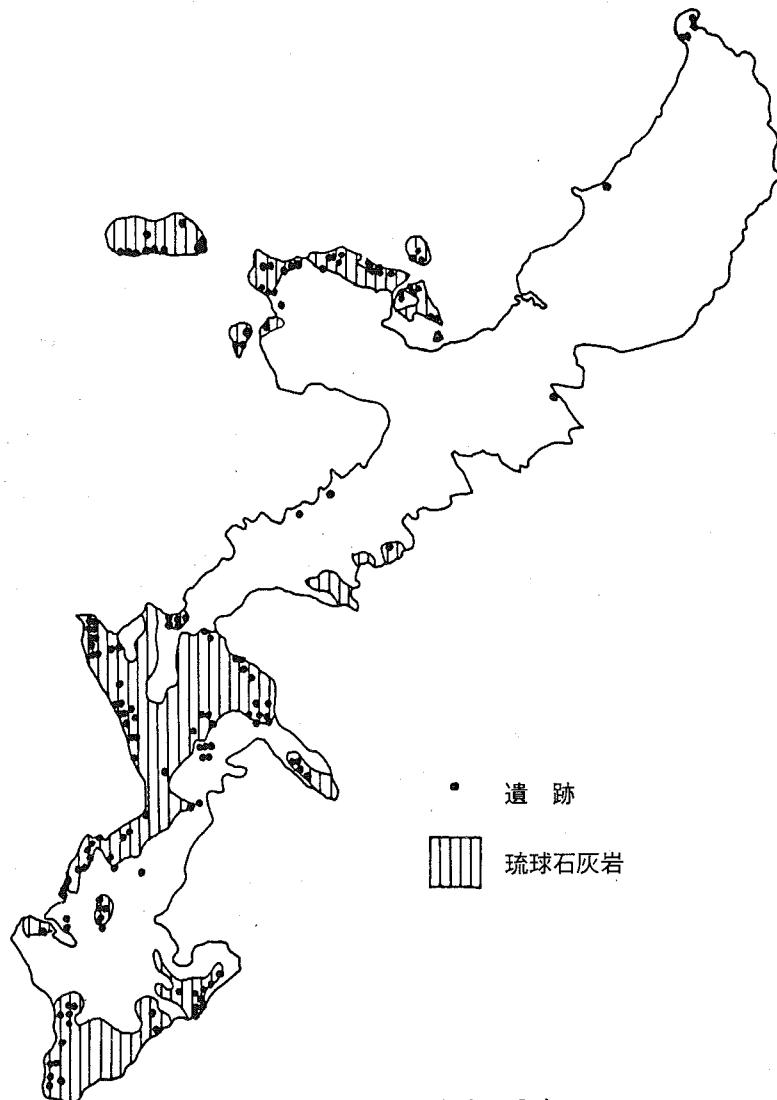


図1. 琉球石灰岩と遺跡の分布

2. 石材としての琉球石灰岩

グスク時代以降になると、多くの城が形成される。城の石垣に利用されている岩石のほとんどは琉球石灰岩である（例外的に北山城跡のように古い時代の石灰岩が使用される場

合もある）。また、それに伴つてできた道路や町並みの石垣等も多くは石灰岩である。琉球石灰岩が分布しない地域や離島、たとえば伊平屋島、伊是名島などでは、テーブルサンゴ（琉球石灰岩の主な構成物の1つでもある）がしばしば利用されている。

このような石材としての琉球石灰岩の利用は現在も盛んに行われており、各種ビルの敷石、壁などの表装、また首里城の復元等に関わる工事で大量に利用されている。また、石材として利用できないような軟質の琉球石灰岩は、道路の路盤材としても多く使われてきた。石材としていかに昔から利用されたかは、石材名の「港川石」、「平敷屋のトラバーチン」等の名称に残っている。

3. 琉球石灰岩と鍾乳洞

前述したように、沖縄県の島じまには琉球石灰岩が広く分布するため、当然ながら鍾乳洞が多い。その実数は押さえることができないくらいで、わかっているだけで1000以上あるといわれている。なかでも、玉泉洞のように長さで日本第2位といった鍾乳洞も存在する。これらの鍾乳洞の幾つかは、玉泉洞に代表されるように、観光洞として開発され、観光立県を目指す沖縄県に貴重な観光資源を提供している。また、多くの鍾乳洞は、第二次世界大戦時に、自然の防空壕としての役割も果たし、沖縄県民の多くの命を戦火から守ってきたという意味においても、私たちの生活に大きな役割を担ってきたのである。

4. 琉球石灰岩と地下水

琉球石灰岩は、新しい岩石であることと、鍾乳洞やフィッシャー（割れ目）が多いことから、岩石中に空隙が多く、代表的な透水層である。従って、石灰岩の下に不透水層があると、典型的な帶水層を形成する。つまり、その境目からは地下水が湧き出て泉を形成し、昔からヒーヤーとして人々に豊富な飲料水を提供してきた。琉球石灰岩分布地域の集落はこのような地に発達していった。また、琉球石灰岩は急崖を形成するが多く、その上は見晴らしがよく、近づきがたい地形を作っている。そのためにグスクがつくられていることが多い。だから、グスク時代の遺跡も琉球石灰岩分布地域に多いわけである。

宮古島のように、島全体が琉球石灰岩でできている島では、川がない。従って、島の水は全てが地下水に頼ることになる。最近では、その地下水を地下でせき止めて地下ダムをつくり灌漑用水などに有効利用している。

5. サンゴ礁（琉球石灰岩）と赤瓦

琉球石灰岩は昔のサンゴ礁がもとになってできた岩石である。現在も、沖縄島の周囲にはサンゴ礁が発達し、エメラルドグリーンの美しい海の景観を作っている。また、青空に

映える赤瓦の屋根も美しい。その赤瓦の屋根が沖縄の青い空に引き立つのは、瓦をつなぎ止める白い漆喰の線があるためであろう。その漆喰であるが、以前はサンゴを焼いて作った消石灰が利用されていた。このように、琉球石灰岩のもとになるサンゴ礁の段階から我々の生活と密接な関係を持っているわけである。

また、島の沖に発達するサンゴ礁は、防波堤の役割も受け持っている。たとえば、1771年（明和8）に石垣島の南方の海底で発生した明和の大津波で、石垣島は海拔20mの高さまで津波が上がり大きな被害を受けたが、最高地点が20.5mしかない低平な竹富島ではほとんど被害を受けていない。この違いは、竹富島の沖合にサンゴ礁が発達しているのに、石垣島の南海岸にはサンゴ礁の発達が悪いために起ったことである。

以上見てきたように、琉球石灰岩（サンゴ礁）は、旧石器時代の昔から現在までいろいろな面で沖縄の人々の生活と大きな関わりを持ってきたわけである。

II. 沖縄県立博物館展示品の石質

1. 歴史展示室の展示品

尚巴志時代の1427年に建立された安国山樹花木記碑と、石質と大きさから玉陵のものと推定される石製扉が展示されている。いずれも中国福建省恵安県一帯産の輝緑岩（青石）製である。他に歴史的収蔵品として、島尻層下部豊見城層の上部に当たる小碌砂岩層の石灰質細粒砂岩ノジュール（いわゆるニービの骨）製の世持橋勾欄羽目（1662年の尚質王時代に慈恩寺から龍潭池に移築されたもの）などが収蔵されている。輝緑岩と石灰質細粒砂岩ノジュールはしばしば石材として使用されるので、以後の説明ではそれぞれ青石とニービの骨（小碌砂岩）を使用する。

また、考古資料として、数多くの石器類が展示されているが、石斧は主に緑色片岩・変輝緑岩類で、その多くは沖縄島北部や慶良間諸島に広く分布する名護層の緑色片岩類である。中でも、緑色片岩類の特徴が慶良間島産の緑色片岩に類似しているものが多いのは注目すべきことである。つまり、石器（特に石斧）の原料となる岩石が慶良間諸島から沖縄島に供給されたことを予想させるのである。当時、陸路を使って重い岩石を北部地域から運ぶより、舟を利用して海路を慶良間から運んだ方が楽だったのではないかと推定できる。想像をたくましくすれば、慶良間諸島に石器工場が存在したといえないだろうか？。

2. 民族展示室の展示品

民俗室に展示された石製品としては、漁労用具と葬儀用具に関するものが多く、他に農事用具や穀物調整用具等に関するものがある。漁労用具としては、追い込み漁の用具であるスルチカヤー石、釣り針が海底の岩にかかったときに岩を砕くのに使うヤナワヤ、釣り

竿の錘に使うタカヤーマ、それにイカリなどがある。ほとんどの用具が琉球石灰岩製であるが、イカリの1つにビーチロック製のものが見られた。

琉球石灰岩は、前述したように、県内の各地に広く分布する沖縄県の代表的な岩石である。その上、沖縄島や各離島の海岸地域ではどこでも見かけるような岩石である。また、この岩石は、沖縄島の北部地域に広く分布する他の岩石類（変成岩、砂岩、頁岩等）に比べて軟質である。つまり、琉球石灰岩は、漁民にとって簡単に手に入れることができたと同時に、加工も簡単な岩石であったことが広く利用されたことの理由であることは容易に想像できる。

イカリに利用されているビーチロックは他県にはほとんど分布しない南方系の岩石で、これも沖縄県を特徴づける岩石である。しかし、その分布は非常に限られている。けれども、その分布が海岸線に決まっており、また、琉球石灰岩より軟質であるため加工がさらに容易であり、むしろそれが手にはいるところでは、琉球石灰岩よりも利用価値が高いといえよう。

農業用具としてはムジシリイシ（麦摺石）が展示されている。これはサンゴ製である。サンゴの模様が洗濯板状に襞があるのをうまく「摺り石」として利用しているようだ。

葬儀用具の代表的なものは厨子である。厨子は大きく陶製と石製にわけられる。石製厨子の多くはサンゴ製である。民俗室に展示された厨子もサンゴ製である。サンゴは琉球石灰岩にも化石としてしばしば含まれるが、石厨子の材料となっているサンゴは現在のサンゴ礁から切り出したもので、目の非常に細かい種類のサンゴ（ハマサンゴの仲間？）、いわゆる方言でキークエーイシ（毛食石）と呼ばれるサンゴが多い。また、祭祀用具として御嶽などに使われている香炉がある。これは凝灰岩製おそらく南九州産の岩石が薩摩を通して入って来たものであろう。また、収蔵された石厨子の中にも凝灰岩製のものがあり、これも香炉の石材と同様に、南九州（鹿児島）産のものであることが推定される。

穀物調整用具としては大豆をすりつぶすための挽き石臼と、薬草をつぶすための石臼が展示されている。前者は硫黄鳥島産の暗灰色～灰色の輝石安山岩で、後者は臼がニービの骨（小禄砂岩）、摺り棒が青石である。輝石安山岩は、硫黄鳥島の中央部の南側に位置するグスク山を構成する岩石で、昔から石臼として利用され、その石切場跡は現在でも残っている。硫黄鳥島は徳之島の西方約65kmにあり、現在久米島の具志川村に属する島である。かつて琉球王国時代に重要な貢物であった硫黄を産出する島で、火山の大爆発の恐れがあるとして1959年（昭和34年）以降無人島になっている。ニービの骨（小禄砂岩）は石灰質で比較的軟質な岩石であることを利用し、トーニと同様に深く彫り込み、臼として利用したことになる。摺り棒は青石製の製品の欠片を利用して作製したものと考えられる。

3. ピロティーの展示品

ピロティーには、首里城正殿に使用されていた龍柱（1712年、謝敷宗達作）が展示されている。ニービの骨（小禄砂岩）製である。軟質であると同時に均質な岩石であることを利用し、精巧な彫刻が施されている。ピロティーの角の自然室の前にはニービの骨（小禄砂岩）製の琉球政府立博物館の碑が展示されている。このように、ニービの骨（小禄砂岩）は、琉球王国時代から現在まで、広く沖縄の代表的な石材として利用された岩石である。

4. 博物館構内の石製収蔵品

構内には、石灯籠、礎石、石敢當、トーニ（イシタライ、トゥージ）、サーター車等数多くの石製収蔵品が展示配置されている。中でも礎石類が数10個ともっとも多く、続いてトーニ類が12個と多い。他にサーター車4個、石灯籠3個、石敢當が2個で、残りは自然石である。

まず礎石類であるが、青石製と沖縄島南部産のニービの骨（小禄砂岩）製がある。前者は円覚寺山門の礎石で高倉北側の博物館軒下に積まれている。後者はプレハブ製収蔵庫の西側に20数個、南西側コーナーに1個、博物館入り口南東側に5個、また復元された円覚寺鐘楼の礎石として4個が利用されている。

次にトーニ類であるが、高倉周辺に配置されている。非石灰岩質の砂岩製6個、琉球石灰岩製5個、それにニービの骨（小禄砂岩）製が1個の3種類が確認できる。非石灰岩質砂岩製のイシタライとトーニは、いずれも八重山層群の砂岩に酷似しており、与那国島において作製されたことが推定できる（イシタライは与那国産であることが確認済み）。トーニを造る琉球石灰岩は碎屑性石灰岩と石灰藻球石灰岩であり、いずれも沖縄で一般的に見られる琉球石灰岩である。ニービの骨（小禄砂岩）製のものは、他のトーニに比べて扁平であり、ノジユールの一般的形態を保持している。

サーター車は全部で4個、高倉の北側軒下に置かれている。そのうち3個は非石灰岩質砂岩製、1個は石灰岩質砂岩である。表面が汚れているため、石質の同定は難しいが、前者が沖縄島北部の嘉陽層の砂岩に類似し、後者はニービの骨（小禄砂岩）製であろう。サーター車には硬質の岩石が適していることを考えれば嘉陽層の砂岩はそれに適合しているといえる。しかし、ニービの骨（小禄砂岩）は石灰質で比較的軟質な岩石であることから嘉陽層砂岩より少々品質が落ちる。

石灯籠は博物館玄関に向かって右側庭に配置されている。太平洋戦争（第二次世界大戦）前に中城御殿（現在の博物館敷地にあった）の庭に配置されていた石灯籠で、3個のいずれも石英安山岩質溶結凝灰岩製である。石灯籠の岩質は、南九州（鹿児島）産の岩石に酷似する。

石敢當は2個、高倉の東側に配置されている。北側のものが琉球石灰岩のサンゴ石灰岩製、南側のものがニービの骨（小祿砂岩）製である。ニービの骨（小祿砂岩）製のものは儀間真常または玉城朝薰作といわれるが確かではない。

III. 博物館周辺の石製文化財

沖縄県立博物館は首里城のすぐ近くにあり、昔の王都としての面影を色濃く残した町に位置する。従って、周辺には数多くの文化財が分布している。なかでも、尚真王時代を中心とする石造建造物の多いのが特徴である。首里城そのものがほとんど石製建造物であり、そこから尚家の識名園へつながる道路、また南部への主要道路であった金城町の石畳とその周辺の石垣、それに城周辺に数多く分布するカー（井戸）の石積みなど、数え上げればきりがない。これらはいずれも沖縄に広く分布する琉球石灰岩の切石である。これらの琉球石灰岩については前述したので、ここでは個別的な石製文化遺産についてのみ記述したい。説明の都合上3地域に区分して説明する。

1. 円覚寺およびその周辺

① 円覚寺

円覚寺山門の礎石については博物館の項で述べたので、ここでは放生橋について述べる。放生橋は、総門から山門に通ずる参道に架けられた橋である。1498年尚真王の時代に建造された。高欄の石材は総門や山門の礎石と同じ福建省産の青石である。橋台の上に架け渡した2枚の板石は琉球石灰岩製である。高欄の青石に刻まれた彫刻は、沖縄の石材彫刻の最高傑作と言われている。

② 弁財天堂

弁財天堂は円鑑池の中央に位置し、それに渡る橋が天女橋、龍潭池との間に架かる橋が龍淵橋である。天女橋は尚真王時代の1502年に建造されたもので、高欄がニービの骨（小祿砂岩）製、橋台と敷石は琉球石灰岩である。龍淵橋は、かつて高欄があり羽目板には精巧な彫刻が施されていた。その一部は県立博物館に収蔵されているが、ニービの骨（小祿砂岩）製である。現在見られる橋は琉球石灰岩の切石が利用された部分だけである。天女橋を渡り、弁財天堂の前に出ると、手水鉢と石灯籠が配置されている。これらはいずれも溶結凝灰岩製であり、博物館構内の石灯籠と同様に南九州（鹿児島）産の岩石である。同質の岩石で造られたものには他に旧天界寺の仁王像がある。

③ 県立芸術大学構内の石造物

県立芸術大学は旧沖縄県師範学校跡に建てられている。芸術大学構内の弁財天堂よ

りのコーナーに、沖縄師範学校跡の石碑が建立されているが、その傍らの門柱は溶結凝灰岩製である。沖縄県立師範学校が現在の場所に移転したのは1886年（明治19）である。その他、大学構内には沖縄県立芸術大学の碑、沖縄師範学校附属小学校跡の碑および沖縄県師範学校跡の碑がある。前2基は久米島産の変質安山岩（グリーンタフ）、後者は沖縄島北部産の嘉陽層砂岩である。

④ 園比屋武御嶽

尚真王時代の1519年に建てられた御嶽。本体は琉球石灰岩の切石で、屋根の棟石・懸魚・火焔宝珠がニービの骨（小禄砂岩）製。香炉に砂岩と赤色の安山岩が利用されているが産地は明らかでない。博物館近くの安谷川御嶽にも赤色の安山岩製香炉が設置されている。また、凝灰岩製の宝珠も設置されている。安山岩や凝灰岩はいずれも第四紀の新しい岩石の様相を示しており、県内では産出しない岩石である。従って、これらの石材は鹿児島県あたりから持ち込まれたものと推定される。

⑤ 天山陵の石棺台座

県立博物館近くの池端町在の北谷氏敷地内に天山陵跡があり、青石製の石棺の台座が現存する。この天山陵は、第一尚氏の墓と言われている。もしそれが正しければ、安国山樹華木記碑とならび最も古い青石製の遺物の1つということになるのだが？。

2. 首里城

① 首里城正殿

1508年、尚真王時代に首里城が拡張されたとき、正殿の建つ基壇の縁にある高欄には大量の青石が利用された。また、石段の登り口左右には、やはり青石製の龍柱が建てられている。しかし、度重なる破壊にあい、現存するのは1712年に造られたニービの骨（小禄砂岩）製のもので、龍頭の部分だけが県立博物館に収蔵されている。

② 龍樋

1523年、沢祇盛里が中国から持ち帰った吐水石龍頭が青石製である。龍樋の周辺には、吐水石龍頭から湧く清水を称える碑が、1719年～1866年にかけて7基建立された（現在のものは復元されたもの）。それらはいずれもニービの骨（小禄砂岩）製である。

③ 歓會門前の石獅子、その他

歡會門の前に一対の石獅子が設置されている。これは首里城復元時に設置されたもので、久米島産安山岩が使用されている。また、木挽き門前には、史跡「首里城跡」の碑と琉球大学跡の碑が建立されている。前者は内地から輸入された花崗岩、後者は久米島産の安山岩が使用されている。

3. 守礼門

1527年、尚真王時代に建立された守礼門には青石、ニービの骨（小祿砂岩）、安山岩が使用されている。まず、礎石8個のうち6個は青石、2個は1959年に復元されたときに補充された久米島産の変質安山岩（グリーンタフ）である。礎石下敷石はニービの骨（小祿砂岩）製であるが創建時のものは2個で、他の6個は同質の岩石で復元したものである。また、石製の控柱と柱の挟石はいずれも久米島産安山岩である（図2）。

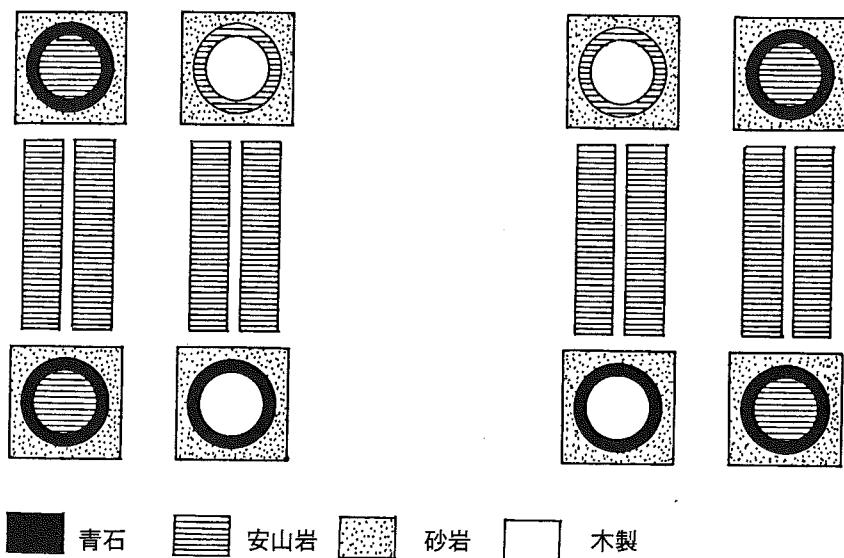


図2. 守礼門の石材

4. 玉陵

玉陵は1501年、尚真王代に造営されたもので、石獅子・碑文・中室扉・西室扉・門扉軸摺石等に青石、高欄にはニービの骨（小祿砂岩）が使用されている。

IV. 文化財の石材についての一考察

沖縄県立博物館の石製収蔵品および博物館周辺の石造文化財のいくつかについて、その石材の岩質を見てきた。その結果、使用されている岩石はそれほど種類は多くなく、中国福建省産の青石、沖縄産のニービの骨（小祿砂岩）・琉球石灰岩・砂岩（嘉陽層、八重山層）・サンゴ、それに鹿児島産の溶結凝灰岩・安山岩等が見られるだけである。これらの石材について、沖縄への輸入の時期等も含めて考察してみたい（表1）。

中国福建省産の青石製文化財の岩質については加藤（1985）の岩石学的な詳しい研究が

表1. 時代別に見た石材の利用

	1372年以前 (察度以前)	1372~1609年 (察度~第一尚氏~尚寧王)	1609年~明治 (尚寧王~)
青 石 (中 国)		安国山樹花木記碑(1427) 円覚寺礎石(1493) 小祿墓石厨子(1494) 国王頌徳碑(1498) 円覚寺放生橋高欄(1499) 天山陵石棺台座(?) ようどれ石棺(?) 玉陵石厨子・石獅子・碑文・中 室扉・西室扉・門扉軸摺石(1501) 首里城正殿基壇の石高欄・龍柱(1509) 国王頌徳碑*** (1522) 龍樋(吐水石竜頭)(1523) 守礼門礎石(1527) 添繼御門碑文*** (1546)	
溶結凝灰岩 (鹿児島)			天界寺仁王像 (1644年頃) 弁財天堂の手水・石灯 籠(1859頃) 中城御殿の石灯籠 (1870頃) 沖縄県師範学校門柱 (1886)
閃緑岩 (渡名喜)			ようどれの碑文* (1620年)
ニービの骨 (沖 縄)		世持橋勾欄羽目(1475)** 玉陵欄干(1501) 天女橋高欄(1502) 龍淵橋高欄(1502) 園比屋武御嶽棟石(1519) 守礼門敷石(1527) 崇元寺下馬碑(1527)	「中山第一」(1719) 「雲根石髓」(1756) 「湯谷靈源」(1800) 「活澆澆地」(1808) 「源遠流長」(1838) 「飛泉漱玉」(1838) 「靈脈流芬」(1866)
琉球石灰岩 (沖 縄)	数多くのグ スクの石垣	円覚寺放生橋板石(1499) 天女橋板石・龍淵橋本体(1502) 園比屋武御嶽(1519) 金城町石畳(1522) 崇元寺第一門(1527)	数多くの石棺

* ようどれ造営(1261) ** 慈恩寺橋(1475)より移築 *** 現存しないので推定による

ある。それによると、1427年の安国山樹華木記碑以降1525年の沢祇親方の墓の銘までの約100年に渡って、大部分は1477年～1526年間の尚真王時代に、歴史的な石碑・石厨子等として数多く利用されていることがわかっている。この青石は、岩石学的にはドレライトが緑色片岩相の最低温度部分、またはそれよりやや低い部分に相当する低変成度の広域変成作用を受けて生じた輝緑岩である。

青石は、琉球王国を確立した尚真王が多用していること、その製品に王の業績を記した石碑が多いこと、また遠く第二尚氏初代の王、尚真の出身地である伊是名島の玉陵の石棺にも使用していることなど、首里王府が自らの権威を示すために、わざわざ遠い中国から輸入したものであることを示している。

浦添ようどれの英祖王と尚寧王の墓にも青石製の石棺がある。これまでこの石棺の時代については、①英祖時代、②尚真王時代、③尚寧王時代の3説がある。①の説は察度がはじめて明に入貢したのが1372年で、英祖時代に青石を中国から輸入するほどの交易と財力があったとは考えにくい。③の説について言えば、尚寧王時代によどれが修復されたことが碑文に明記されている（1622年）。では、青石製の石棺もこの時代に作られたのか。しかし、尚寧王の1609年、島津の琉球侵略をきっかけに1612年以降は中国への入貢が激減し10年一貢になっている。従って、青石の輸入もこれまでのように自由にできなかつたであろう。そのことは、青石製の石厨子が尚寧王時代（1622年）に作られたと考えることも難しい点がある。一方、②の尚真王時代であるが、英祖王の石棺の彫刻が、尚真王時代に造られた放生橋高欄の羽目、玉陵石棺等の彫刻と類似性を持つこと、尚真王時代が琉球王国時代に最も栄えた時代であり、他にも多くの石造物が建造されたことなどを考慮すれば、いまの段階では外間正幸氏が唱えるように尚真王時代（尚清王時代までまたがる可能性もあるが）の作と考えるのが妥当のようである（沖縄タイムス、1961年10月14日から16回にわたる記事）。同様な理由で、第一尚氏の墓陵といわれる天山陵石棺台座、伊是名玉陵石棺、小禄大やくもい石棺等も尚真王時代との外間正幸氏の考えを指示したい。

1609年以降、実質的に薩摩の支配下に入った琉球には、中国産の青石に代わり、鹿児島県産の石材が輸入されるようになる。中城御殿の石灯籠、弁財天堂の手水鉢・石灯籠、天界寺の仁王像などに使用された溶結凝灰岩がそれである。特に、弁財天堂は尚真王時代の1502年に建立されたにも関わらず鹿児島産の溶結凝灰岩の手水鉢・石灯籠が設置されているのは、1609年の薩摩の侵略時に弁財天堂が全焼したため、その後に鹿児島から輸入した溶結凝灰岩製の手水鉢等が設置されたものと推定できる。そのことは、手水鉢にかすかに読みとれる「咸豐酉九年九月吉日」（1859年？）の文字からも明らかである。同様に、天界寺の仁王像は再建時の1644年、中城御殿の石灯籠は現在地に移転した1870年頃の輸入と推定される。また、沖縄師範学校の門柱にも同じように溶結凝灰岩が使われている。これ

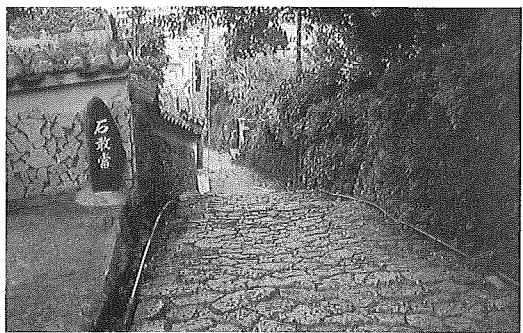
は1886年（明治19）に現在地に沖縄師範学校が移転したときに設置されたものであることがわかる。園比屋武御嶽や安谷川御嶽の香炉なども、その岩石の類似性から、ほぼ同じ時期に入って来たものと思われる（ちなみに安谷川御嶽が修復された時期が1814年である）。このように、溶結凝灰岩の使用は1800年代に集中しており、その使われ方も日本文化の特徴を示すものが多いようである。

沖縄県産の石材であるニービの骨（小碌砂岩）は、彫刻がしやすい岩質（均質、軟質）であるため、1609年以前には玉陵欄干、天女橋高欄、守礼門敷石等、彫刻を施した石材としての利用が多い。しかし、1609年以降は、龍樋の碑に代表されるように、石碑として利用されているものが多い傾向がある。つまり、青石が手に入らなくなった時代に、青石に代わる石材の役目を負うようになったのであろう。一方、琉球石灰岩は軟質な岩石で容易に加工でき、大量に得ることができるため古い時代から築城、道路、石造建築物に広く利用されてきたことは前にも触れたとおりである。また、ニービの骨（小碌砂岩）と琉球石灰岩（サンゴも含む）は、広く庶民の間でも利用されており、屋敷の石垣、石敢當、農事用具、漁労用具などに盛んに利用してきた。

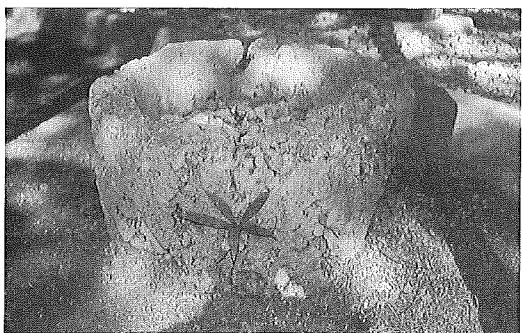
〈参考文献〉

- 外間正幸（1961）：ようどれ石棺の話1-16. 沖縄タイムス記事.
- 池原貞雄・加藤祐三編著（1997）：沖縄の自然を知る. 築地書館, 269p.
- 加藤祐三（1985）：沖縄県首里城周辺の産地不明石材の岩石学的研究. 琉球大学理学部紀要, 第39号, p.63-81.
- 木崎甲子郎・目崎茂和編著（1984）：琉球の風水土. 築地書館, 249p.
- 木崎甲子郎（1981）：沖縄の自然. 平凡社, 245p.
- 沖縄県教育委員会（1994）：沖縄の文化財. 沖縄県立博物館友の会, 173p.
- 沖縄県教育委員会（1995）：沖縄の文化財. 沖縄県立博物館友の会, 173p.
- 高良倉吉・田名真之編（1993）：図説琉球王国. 河出書房新社. 127p.
- 玉陵復原修理委員会（1977）：重要文化財玉陵復原修理工事報告書. 沖縄県, 121p.
- 琉球政府文化財保護委員会（1959）：首里城守礼門復元工事報告書.
- 琉球大学公開講座委員会（1986）：沖縄のサンゴ礁. 琉球大学公開講座4, 196p.

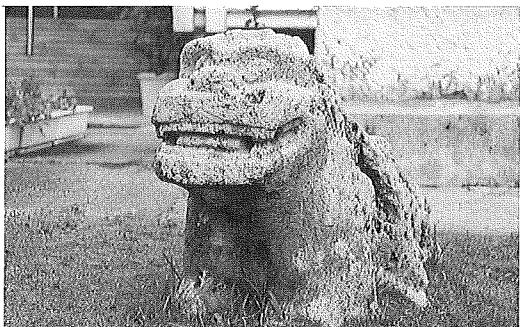
PLATE 1



1. 金城町石疊



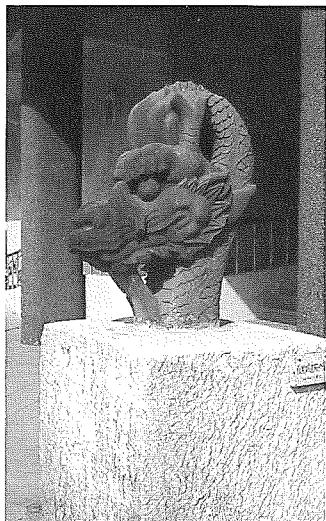
2. トーニ



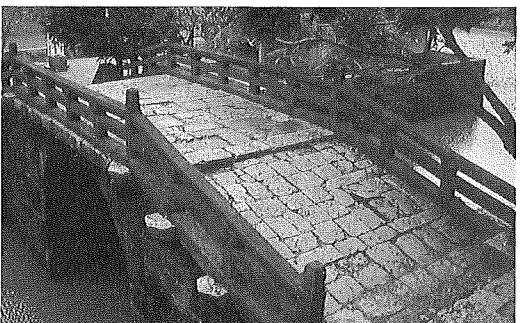
3. 石獅子



4. 石厨子



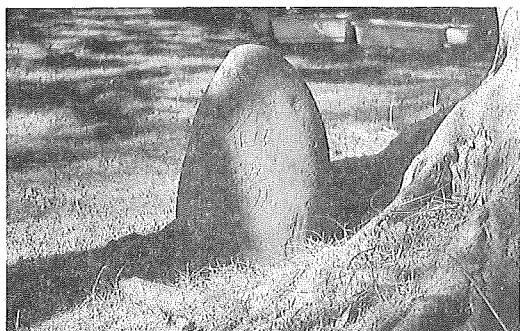
5. 首里城龍柱



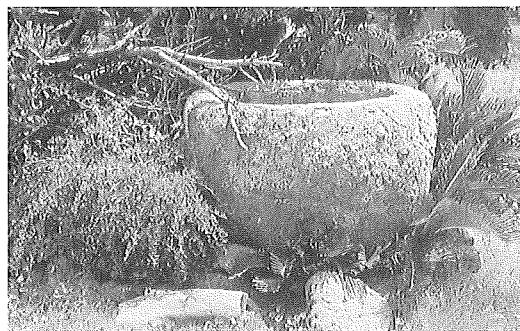
6. 天女橋

(1 - 3 . 琉球石灰岩製 4 . サンゴ製 5 - 7 . ニービの骨製)

PLATE 2



7. 石敢當



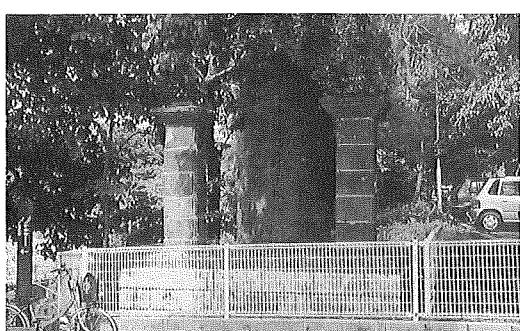
8. トウージ



9. 中城御殿の石灯籠



10. 弁財天堂の手水鉢と石灯籠

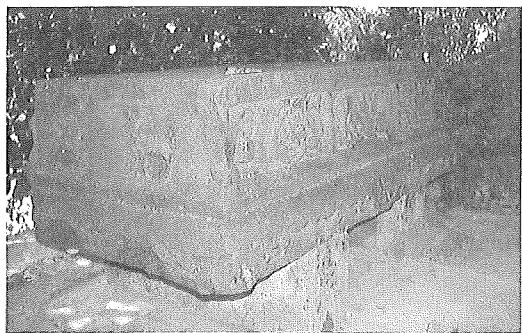


11. 沖縄師範学校の門柱



12. 円覚寺の放生橋

(8. 凝灰角礫岩製 9-11. 溶結凝灰岩製)



13. 天山陵石棺台座



14. 円覚寺山門礎石



15. 守礼門礎石



16. 玉陵の碑

(12-16. 福建省産青石製)